

ご説明

このお話は、TV版『機動戦士ガンダムZZ』以降の話になります。ここまでの経緯に関しては、ハマーンのファンである方なら知らない人はいないかと思えますので割愛します。また、過去の私が書いた小説をネタにしてるシーンもありますので、他の話もご購入なりをして読んで頂ければ幸いです。それと、ハマーンの声を脳内再生する場合は、当時の榊原良子さんの声か今の時代であれば桑島法子さんの声でお願いします。

*

*

*

プロローグ

公式な記録を見ると、ネオ・ジオンの指導者である私……ハマーン・カーンは宇宙世紀0089に、エウーゴの非正規パイロットであるジュード・アーシタとの戦闘で死亡したと記録されている。

ジュードの証言によると、MSキュベレイは戦線離脱後に爆発し、搭乗していた私はその際に戦死したとの事だ。だが彼以外は誰一人その現場におらず、ジュード自身も私の遺体を確認した訳では無いのだ。それ故に本当なら生死不明が正確なのだが、事態を迅速に収束させたかった連邦政府が私を「戦死」扱いとした為、それが正式なデータとして残ってしまった。

また、ジュードはその後、この件に関するコメントを一切拒否している事から、一時は私を匿っているのではないかと言われたが、その話もやがてシャア・アズナブルの決起により皆の記憶の中へと埋没していった。

だが、私はこの通り生きている……いや、生き残っている。

この文章を読む幸運な機会を得た貴方だけに、私の……その後の生き様を伝えよう。

*

*

*

第一部

「ここは……どこだ？」

どの位経った頃だろう。私は、布団の柔らかな香りに包まれながら目を覚ました。

ジュードーとの戦闘でキュベレイが爆発した光景を最後に、私の記憶はぷつぷつりと途切れていた。その私が見知らぬベッドの上で目覚めた時、一瞬自分は亡くなった筈だと思ったとしても仕方が無い事だと思う。部屋の電気は点灯していたが、一体ここが病院なのか、それとも何かの別な施設なのか皆目検討が着かなかった。なぜなら、ここにはどういう場所かを示す物が一切置かれていないからだ。

閉鎖的な空間に簡易ベッドが一つと、傍らには使用済みの点滴セットが残されているだけの質素な空間だった。

やがて、意識がはつきりしてくるにつれ、私は……私が仲間と共に作り上げた組織であるネオ・ジオンが崩壊した事、ジオン再興を為し得る事が出来なかった事が、実感となつて沸き上がってきた。

だがシャアが去った後では、いずれこうなる事は判っていた筈だった。覚悟していたことだった。だが、それでも割り切る事が出来ないのが私なのだ。

静寂な空間、私以外誰もいない空間……そんな閉鎖的な空間で、私はじっと天井を見上げながら、誰に遠慮する必要も無く大声で泣いた。

シヤアがアクシズを去った時以来、涙を封印した筈なのに……。

「お姉さま……ドズル様……ご免なさい……ううっ」

涙で枕がグシャグシャになっても、私の涙は留まる事を知らなかった。もちろん姐やドズル様とジオンの再興を直接約束した訳では無い。だが、シヤアがアクシズにいた頃、二人が仲むつまじくじゃれあっている写真に対して立てた誓いは、やがて自分の中で絶対的な約束事へと変化していったのだ。

どの位泣いていたのだろうか。心が落ち着いた私はベッドから起き上がろうとした。

だが、昏睡していた期間が長かったらしく関節が固まって思うように体が動かせなかった。それでも何とか上体を起こすと、裸で寝かされていた私の体から掛け布団がずり落ちた。胸が露わになり、乳首のピアスが光った。誰が見ている訳でも無いが、やっぱり少し恥ずかしい。

シヤアに心を預けていた頃、彼の性癖に素直に従い、彼のメス奴隷となった証に付けたピアス…。

私の全てを知っているシヤア。私の全てを捧げたシヤア。私の元を去り、私と敵対した事もあったが、それも全て過去の話である。彼がエウーゴの代表としての仮面を脱ぎ去った時に、私達の中での全てのわだかまりは解消していた。

彼への憎しみは、言ってみれば彼への愛情と同じなのだ。それは、男女の深い仲になれば判らない事なのかも知れない。

私はグリプス戦後、彼としばらく一緒に過ごしたのだが、どうしてもお互いの道を一つにする事は出来なかった。それでも私の彼への想い、そして忠誠心は変わる事が無かった。

それならば、私は彼が再び立ち上がる日まで、彼が進むべき道を作っておけばいい。

それが、私が彼に対して出来る最善の事であり、メス奴隷としての忠誠心の現れであった。

やがて私は無意識に股間に手を這わした。尿道にカテーテルと、アヌスに排泄の管が繋がれているのは感覚で判っていたが、関節が固まるまで寝ていた割には、股間の毛が全く生えていない事に気付いた。

「えっ？何？あっ！やだっ……」

私は永久脱毛している訳では無いので、日々手入れをするのが日課なのだが、私の代わりにそれを行つた者がいるという事だ。その瞬間、私の中に猛烈な羞恥心が芽生えた。

顔が火照り、心臓の鼓動が高鳴った。

そうなる私はいても立ってもいられなくなり、この場から逃げ出したくなった。

と、その瞬間、部屋の自動ドアが開いた。私は慌てて布団の中へ潜り込み、枕元まで歩いてきた人間を恐る恐る覗き見た。

「あっ……」

いつもとは違うサングラスをしているが、シャア・アズナブルだった。その脇には、私が彼に接触を促してネオ・ジオンから軍籍を抹消したナナイ・ミゲルの姿も見えた。

静かにサングラスを取った彼は、とても穏やかな表情をしていた。

「気分はどうだ？ハマーン？」

「……」

様々な思考が私の頭の中を駆けめぐった。何を話したらいいか判らない私は、ただ首を縦に振る事しか出来なかった。

そんな私に彼はそつと頭を撫でて、こう話すのだった。

「ナナイに私と接近するように指示をしたのは、お前にしては賢明な判断だったな」

彼は側にいるナナイの方を見ると、彼女が軽く会釈をした後、私に話しかけてきた。

「お久しぶりです。ハマーン様」

「……ナナイか……元氣そうで何よりだな」

「ええ。ハマーン様の指示通りに大佐と接触する事が出来まして、今は一緒に活動させて頂いてます」

「そうか……アクシズでの研究情報や資産は……」

「全て、提供済みです。御安心下さい」

ナナイの幸せな表情を見て、私は安堵の表情を浮かべた。だが本来なら私が収まりたかった立場にいる彼女に対して、少し嫉妬の炎も生まれた。

出来る事なら。今からでもその立場を自分が……という気持ちは確かにある。だがもうそれは不可能であり、仮にそれを強制してしまうという事は、私が彼に託したナナイを排除すると言う事だ。それだけは……絶対に出来なかった。

そうしていると、シヤアが私と軽く口付けを交わした後、そつと口を開いた。

「お前が提供してくれたMSの情報を元にして試作機を作ってみたのだが、想像以上の性能だったよ。」

感謝している。」

じっとシヤアを見ながら、私はぼつりと呟いた。

「……何故私を助けた？」

「ん？お前は私が進むべき道を開いてくれた……それにお前は死んで欲しくない人間だ……それだけの事だ」

「シヤアにそう言われると……嬉しいものだな」

お世辞かも知れないと思ったが、それでも心が安まる。

「今まで済まなかったな……あとは……私に任せてくれ。今更だがやつとお前が期待するシヤア・アズナブルを演じる事が出来るよ。もつとも、少し時間がかかり過ぎてしまった感じがするがな……」

「……そんな事……そんな事無い……シヤア……」

私は動きづらい手を強引に動かしてシヤアを抱き締めると、彼に濃厚なキスをした。

彼の優しさが伝わってくる。長く、長く待っていたこの時がやっと来たのだ。命を落とさなくて本当に良かったと思った瞬間でもあった。

*

*

*

私は下着と服を着た後、シヤアの執務室へと移動した。簡素ではあるが、最低限の設備は備わっている感じの部屋だった。

そこまでの移動をナナイによって車椅子で運ばれた私は、入り口からそのソファーまでの間位は自力で歩いてみる事にした。その事を彼女に話すと、当然のように驚いた口調で止めようとした。

「まだ自力で歩くには早過ぎます！焦る必要はないのですから、体を大事にして下さい。ハマーン様！」
「ありがとう。でも人間の体というものは気を抜くとすぐに弱くなる生き物なんだよ。少しいじめる位が丁度良いのさ……あつ！」

そう言いながら立ち上がろうとした私だったが、足に力が上手く入らずに、床に倒れるように転がってしまった。

慌てて介抱しようとするナナイを私は制止して、何とか四つん這いになりながら、必死にソファーマで辿り着き、何度か体勢を崩しながらもやつと座る事が出来た。

やがて、それを見届けたナナイが隣りに座り、シャアが対面に座った。心配しながらも、私だから仕方が無いか……という表情をしていた。

「息が上がってるぞ。ハマーン」

「そうだな。……筋力も体力も相当落ちてるようだ」

「その様子では、私とベッドを共にする日まで何日かかるか分からんな」

「ふふっ。シャアがその気なら、今からでも構わんのだぞ。文字通り身動きが取れない私を、思う存分調教出来ると言うものではないのか？」

「残念だが、私はそういう趣味では無いのでな。恥じらいながらも自分の欲望に負けて自ら体をくねらせる女性が好きなのだよ」

「相変わらず、変態な性癖は変わらないのだな。シャア……？」

「お前こそ、そんな私に調教されるのが好きなのは変わってないんだろう？ハマーン？」

シャアの言葉に、私は返答に詰まりながら、無言でコクリと頷いた。強がってはいても、彼の前では嘘を言う訳にはいかない。私達はそういう関係なのだから……。

「ところで話は変わるが、何故ナナイに私と接触するように指示したのだ？確かにその情報と資金で私の活動がかなり楽になった事は事実だが……」

自分で入れたコーヒーを一口飲みながら話すシャア。

「連邦に渡す位なら……というのが一番の理由だが、ナナイをシャアの元へ行かせようと思った時は、もう内部がガタガタの状態修復不可能な状態だったというのが本当の話だ」

「ほう。ネオ・ジオンの様子は日々ニュースでチェックしていたのだが、そんな素振りは無かったし、順風羽満帆のようにも見えたのだが……」

「内部のゴタゴタを素直に見せる訳にはいかないからな。ダカールでのパレードの後にコロニーを落とした後、ギレンの亡霊であるグレミー・トトが反乱を起こしたのだ。だが部下の多くは何故同じ仲間が戦う羽目になったのか理解出来なかった筈だ」

「それ位の事、なぜ力ずくで押さえ込まなかったのだ。お前なら出来る筈だろうに？」

私は一呼吸置いてからこう答えた。

「ああ、そうだな。でもそのお陰で私はシャア・アズナブルというかけがえのない仲間を永遠に失ってしまったからな。もうそういう事はしたく無かったよ。それに反乱の首謀者……グレミー・トトにもそれなりの大義名分はあったし、いずれは主導権を握る戦いになるとは思っていたが、あの時点で反乱を起こされては……もう、私の力だけではどうする事もできなかった。後はこれ以上無駄な犠牲者を出さ

ずにどうやって幕を引くかという事だけを考えていたさ」

「とは言え……反乱が無かったとしても、お前が率いたネオ・ジオンは、あのままだとどの道負けるのが目に見えていたのではないのか？」

「今更何を言う。それは以前肌を重ねた時……グリップス戦が終わった時点で既に判っていたし、散々話した事だ。私が勝つ為に戦った訳では無い事など、お前が一番良く判ってる筈だ」

「すまん……そうだったな。お前はそれを承知で戦いを続行したんだったな」

「ふふっ。だが全く勝算が無かった訳でも無いさ。当初はエウーゴに属しないまでも、宇宙にいる者達をもっと我々に協力する手筈だった。だが……予想以上に『ジオン』のアレルギーは酷かったという事だ。実際に各コロニーを回ってみて良く判った。表向きは良好な関係を維持したいというのはこのだが、いざ本番になると皆手の平を返したように連邦側へ寝返ったさ」

「ふっ、私はお前よりも先に地球圏へ来ていたから、それは身に染みる位判っている。だからこそ『人がニュータイプへと変わるその日を待つ』と言ったのだが……」

シャアはグリップス戦中に私と劇場の様な所で交わした言葉の事を言っていた。

「今なら……シャアの言葉の意味がよく判る。だが、この機を逃して再び連邦内で内乱を待つ為の心の余裕が、残念ながらアクシズの中には無かった……。それ故に、例え無駄な戦いと後に笑われても、それを行う事で時の流れを少しでも変える事が出来るのならと……私はそれに賭けた……それだけだ」

「確かに、お前がダカールを無欠占領した際、各コロニーの首脳部の反応が微妙に変化した事は紛れも無い事実だった。まあ、これ以降連邦の締め付けが更に強くなれば、不満の捌け口を求める民衆を味方

に出来るから、私の活動も一層やり易くなるというものだが……」

「ふふっ、私はお前がそうする事をずっと願っていたよ。シヤア……」

「……済まないな。ハマーン」

「ふっ、シヤアが謝る事では無い。単に時の巡り合わせが悪かったただけだ……」

私はそう答えると、じつと天井を見た。そうしていると、シヤアがそつと呟くように言った。

「お前は、何故そんなに私の事を気にかけてくれるのだ？」

「……私はお前がアクシズにいた頃に、私との間で交わした約束……いや『契約』を守ってるだけだ」

「……あんな事か？」

「どんなものであろうとも、契約は契約だ。特にお前との契約だから、私の方から破る訳にはいかないのさ。なぜなら、お前と交わした契約は『主従関係』の契約だから……」

「律儀な女だな……ハマーン」

「私はそれ程傲慢では無いよ……シヤア……」

「今でも、私に対する気持ちは変わらないという事か……」

私は、顔が赤くなりながら頭をそつと縦に振った。彼はソファから立ち上がって頭を軽く撫でると、そのまま壁際まで歩き出して窓の外を無言で眺めた。

どの位そのまま時を過ごしたのだろう。やがて彼はナナイに席を外すように命じた。彼女は無言で席を立ち、一礼をして部屋から去った。シヤアはそれを見届けた後に私にこう告げた。

「そろそろお互いの立場としての話は終わりにしよう。これからは男と女……いや、主人と奴隷として

の話をしようか？」

「え？あ……はいつ。判りました。ご主人様」

ナナイを退出させた理由を察した私は、頬を赤らめながらも素直に頷いた。

＊

＊

＊

「では、私の質問に嘘偽り無く答える事を誓えるか？ハマーン？」

シヤアの問いに、私は躊躇無くこう答えた。

「はい。私ことハマーン・カーンは、シヤア・アズナブル様の忠実なメス奴隷です。ご主人様の質問には嘘偽り無くお答えする事を誓います」

「良い心がけだな。では、もし私の質問に嘘の答えをするようなら……それなりのお仕置きをするから覚悟しておけ。そうだな……大量浣腸をした後に栓をしてしばらく放置するとか、私の部下達の前でオナニーショーでも披露するとか……以前のように首輪を付けて露出散歩もいいかもな……」

その言葉を聞いた瞬間、私の心の中にある淫らな部分がドクンと脈打つ感じがした。その心の変化をシヤアは見逃さなかった。

「ん？なんでそんな嬉しそうな表情をする？そうか、ああ……そうだったな。お前はそういう事をされたいと願う変態だったな。ならば、ナナイに命じて絶頂寸前で止める行為を一日中行ってやろうか？」

シヤアはそう言うのと優しく耳の後ろを撫でた。

「あんっ！」

反射的に声を出してしまった。

「ナナイに……色々な事を仕込んだのもお前だな？」

彼は実務の事ではなく、ベッドでの行為について聞いていた。

「はい。実務だけでは満足しては頂けないと思ひまして、私が知ってる限りの事を彼女に伝授したつもりです」

「やはりな。初めて抱いた時、余りにも私の感じる所を知ってるので驚いたよ。それで縛って快樂の渦の中で問いただした所、お前に教わったと言っていた。それだけならまだしも、お前が私に受けたSM行為を一通り教え込まされたと言ってたぞ」

「はい。緊縛、吊り、剃毛、鞭、蠟燭、浣腸から野外露出まで、ご主人様が私に行った全ての事を仕込みました」

「それに関しては感謝している。初歩から教える手間が省けたからな。そのお陰で彼女の体からは縄の跡が消える事は無い位だ」

「ご主人様に存分に楽しんで頂けまして、ハマーンはとても幸せです」

少し心に引っかかるものを感じながら答えた所、シヤアはニヤツと笑って私に言い放った。

「ハマーン？」

「はい」

「今、自分の心に嘘を付いたな？」

「え？」

「本当は自分がそういう立場になりたかったのではないのか？」

さすがシャアだ。私の心の揺らぎを的確に突いてきた。

「あ……も……申し訳ありませんご主人様。本当は私自身がご主人様奴隷として尽くす事が一番の幸せなのですが、ナナイの受けている行為を聞いた時、つい幸せだなどと嘘の言葉を言ってしまった。どうかお許し下さい」

彼は微笑みながらこう答えた。

「ハマーンは本当に素直で可愛い奴隷だよ。だがそれとお仕置きは別だ。判るか？」

「はい……」

「では、嘘を付いた罰として、裸になって私のお仕置きを受けて貰うが……いいか？」

「はい」

「病み上がりでも容赦はしないが……それでもいいか？ハマーン」

私の答えは明白だった。

「はい。私は本来なら先の戦闘で死んでる身です。それがご主人様の為に尽くせるのであれば、これ以上の幸せはありません。どうか私……ハマーンに、ご主人様に対して嘘を付いたお仕置きをして頂きたいと思っています」

私の股間は、いつの間にか少し濡れていた。本当の所、私が嘘を付いたかというのはそれ程大きな問題では無く、単にプレイに持ち込む為の口実に過ぎないのだ。

*

*

*

手足が自由に動かせない体で、床に這い蹲りながらも何とか服と下着を脱いだ私は、シャアによって

全身に縄化粧を施された。足も折り曲げた上体のまま、足首と太股をがっちり縄で固定された。

ただ、手だけは今回縛る事はされず、自由に動かす事が出来た。

久しぶりの感触に体が疼いているのが判った。そのまま私はしばらくの間シャアに全身の愛撫を受け続けた。よがり狂う私に縄が容赦なく食い込んでくるのだが、それがまたとても気持ち良かった。

やがて彼は縄酔い状態の私を四つん這いにさせ、目をつむり頭を床に付けるように命じた。言われるままにすると、アヌスにローションを塗られ、その後浣腸器とはまた違う感覚が私を襲った。

「ひっ！」

私は最初バイブが挿入されたのかと思ったのだが、それにしても小さすぎる……。そう思った時、ポンプを握る音がしたかと思うと、私の中でそれが膨らみ、あつと言う間に私のアヌスを塞いだ。

「ご主人様……これは……」

「ああ、アナルバルーンだ。もちろんこれだけではお仕置きにならないので、浣腸機能付きのヤツにしてみたがな」

やがて私の中に冷たいグリセリン浣腸液が進入してきた。

『あ……入ってくる……ああっ……』

一本目の浣腸液の注入が終わった時、私は久しぶりだったので、うっかりアヌスに力を入れてしまった。だが、空気でパンパンに膨らんだ栓とそれに付属している逆至弁の為に浣腸液が逆流して飛び出してくる事は無かった。つまりもうシャアの許しが無いと排泄すら出来ない状態なのだ。

やがて二本目を注入し終えた時に、シヤアは私にこう言い放った。

「これで終わりだが、お礼の言葉はどうした？」

私は彼の方を向き、跪きながら答えた。

「私のようないやらしいメス奴隷にお仕置きをして下さいまして、とても感謝しております。どうか私の苦しむ姿を見て、ご主人様の心が少しでも癒されるのでしたら、私……ハマーンはとても幸せです」
そう答えている間に、私のお腹に鈍い痛みを感じた。やがてその波はどんどん大きくなり、浣腸特有の痛みが私の体を駆け抜けた。私の表情はみるみる曇り、端から見たら苦虫を噛みつぶした表情になっていた事だろう。

「あっ……！くううっ……！」

関節が思うように曲がらない痛みなど、浣腸の苦しさに比べればまだましに思えた。そうしていると、いつの間にか裸になったシヤアが、私の前に座ると顎を手で軽く上げた。彼と目が合った。

「言い表情だな。ハマーン。その表情がとても可愛いよ……」

「はい。ありがとうございます。ううっ！」

「苦しいか？」

「いいえ、ご主人様の心の苦しさに比べれば、私の苦しきなど無いも同然です」

「そうか。では御褒美だ」

シヤアは私の口を開けると、下を出すように促した。やがてそこへシヤアの唾液が落ちてくる。

「あっ……」

私はそれをこぼさないように口の中へと入れ、ゴクリと飲み干した。

私が浣腸の痛みの中で一瞬恍惚の表情を浮かべた時、彼の口から意外な……しかし隠し切れない言葉が発せられた。

「ハマーン。お前……アムロに抱かれたそうだな？」

「！……」

私の顔から一瞬で血の気が引いた。

「もう一度聞く。抱かれたのか？」

こう聞いてくるという事は、確かな証拠があるから言う事だ。私は観念して口を開いた。

「は……はい！ 私はご主人様のメス奴隷という立場でありながら、アムロに抱かれました。しかし一体何故その事を……」

「ナナイが全て話してくれた。……お前の方から迫ったのか？ 『私を抱いてくれ』とでも言って……」
優しい口調で話してはいるが、彼の心の中に嫉妬の炎が芽生えてるらしく、声が少し裏返っている。

「私のご主人様は生涯シヤア・アズナブルただ一人だけです。関係を持った事は事実ですので言い訳は致しません。ただ、私の話だけは聞いて下さいませんか？」

「……判った。言ってみるがいい」

「はい。私はダカールでの式典の後にサイド6で大物政治家と会う事になったのですが、その前日に極度のプレッシャーに押し潰されそうになり、その捌け口として人気が無い公園で全裸で縄掛けして浣腸

したまま露出行為をしておりました。その時彼に見付かってしまい…」

「脅されて犯された…という訳か？」

「いいえ。彼は私にとっても親切に接して下さいました。私が浣腸の苦痛で歩けないと知ると、トイレまで抱き上げて運び、排泄の手伝いもしてくれた程です。私はそんな彼に甘えてしまい…つい彼のペニスを口でくわえてしまい、そして私の中に受け入れてしまいました…」

私は浣腸の苦痛でその場へお腹を押さえてうずくまった。彼はそんな私の髪を掴み（とは言え、強引にはなく、あくまでも優しくなのだが）目線を合わせまいとする私の頬をもう一つの手で掴み、口調だけは優しく装いながら話した。

「成る程…その状況とその時の精神状態を察すれば仕方が無いという所だが…：…よりによってアムロと関係を持ってしまうとはな…：…私の奴隷のくせに見損なったぞ」

「お…：…お許し下さい。でも彼の名前を知ったのは、私と関係を持ってからの事です。もし最初に彼の名前を知っておりましたら、決して肌を交えようとは思いませんでした」

「本当か？」

「はい。本当です」

私は咄嗟にそう答えたが、彼の名前を知ってから進んで交わり、何度も一緒に絶頂を迎えた事は、決して言える筈がなかった。ましてや、彼との子供を僅かではあっても期待した事など…。

やがて彼は、ブツブツと独り言を言ったかと思うと、再び浣腸器にグリセリン溶液を入れ始めた。

「え…：…まさか…！」

「ああ。知らなかったとは言え、体を重ねた事は事実だからな。お前のテクニクがあれば、アムロと共に絶頂を迎える事など造作も無かっただろうが……それを想像すると私の心はどうにも収まらないのだ。判るか!？」

「それは……アムロに嫉妬していると言う事でしょうか？」

「そうだ。ヤツは私のモノである人間を次々と奪っていった男だ。セイラ……ララア……この上お前までも寝取られたとあつては……」

シヤアの言葉に、私は奇妙な嬉しさを覚えた。

「ご主人様……」

「何だ？」

「こんな私でも……まだ愛して下さるのですか？」

彼は私と濃厚なキスを交わした後に、こう答えたのだった。

「当たり前だ。お前は誰のモノでもない、私のモノなのだから……。ハマーン」

「う……嬉しいです。とっても……」

私の目から自然と涙が溢れていた。私はその後、彼に背を向けると、前屈みになってお尻を尽きた。した。

「私はシヤアというご主人様がおりながら、不覚にもアムロと肌を重ねてしまったふしだら女です。どうか私に更なるお仕置きをお願いします」

「良い覚悟だ。今も苦しい中で良く耐えているが、これよりも更に苦しくなるぞ」

「覚悟の上です。シヤア……いいえ、ご主人様の心の嫉妬の苦しみに比べれば……」

「判った……」

彼はそう答えると、私の中に再び浣腸液を注入し始めた。

今まで点滴の日々だったのと、最近浣腸プレイをしてなかった体には、かなり辛いものがあつた。

「あつ……いたつ……あああつ……くうううう!!」

いくら苦しくても、簡単に泣き言を言う訳にはいかなかった。そうしていると、彼はもう一本注入し、総量で二リットル余りの浣腸液が私の体内に収まった。

床に這い蹲って必死に排泄感に堪えている私のお腹は、まるで妊婦のように膨らみ、圧迫感すら感じた。もう自分の力……肛門括約筋だけでは排泄を押さえる事は出来ないのだが、アナルストッパーのお陰で何とか排泄を我慢していられる状態だった。ただ、それは地獄の苦しみを伴っているのだが……。

私は、お腹を押さえて体を左右に揺らして紛らわそうとした。とにかく何かしていないと、その苦しみに耐えられそうもないからだ。

その光景を見てシヤアが言った。

「まるで妊婦のようだな。ハマーン。アムロとの種付けが成功していたら、今頃はこんな感じになっていた訳だな。お前はそうなりたかったんだろう？」

「ううっ……いいえ……ちっ、違います!」

「何が違うのだ？」

「そ……うっ!それは……」

私は彼を見上げた。一瞬言葉が詰まる。

「どうした？違うなら何が違うか言わないと判らないだろう？」

「はい……私は……」

ゴクリと唾を飲み込んだ後に、大声で言い放った。

「私……ハマーン・カーンは、卑しくも私のご主人様であるシャア・アズナブル様の子供を授かりたいのです！ずっと、ずっと、そう思っ生きて参りました！」

「アムロの子供が欲しいのではないのか？」

「違います！私はシャア・アズナブル様の子供を産みたいのです。それを実現させて頂けるのなら、私などは死んでも構いません！」

言い終わると、私は咄嗟にこう思った。

『とうとう言っちゃった……とうとう……』

彼の目を見る事が出来ず、緊張から下を向いたままガクガクと震えていた。すると、シャアが私の前にしゃがみ込み、手で私の顎をクイツと上げると、優しい顔で言った。

「死んだら……私の子供を身籠もれないではないか。それに、私に子供がいるという事になれば、ジオンの血を利用する者達が、必ずやそれを利用するだろう。お前はその時、それを防ぐ事が出来るのか？」

「はい。その時は私の命に替えましても……必ず防ぎます！！」

お腹の痛みが断続的に襲ってくる中、私はそれを必死に耐えつつシャアの目を見て答えた。やがて彼は私の頭を軽く撫でて優しく言った。

「では、お前がここにいる間、私との子供を身籠もるまでセックス漬けの日々を送ってもらうが…本当にそれでいいのか？」

「はい！とても…とても嬉しいお言葉です」

「だが、セックスとは言っても、こんな感じでハードな行為を伴うのだが…どちらかと言えば交尾や種付けと言った方が良くも知れないが…それでもいいのか？」

「勿論です。私はご主人様に全てを仕込んで頂いた女です。ご主人様が単なるセックスでは満足しない体だという事も充分理解しております。私の全ての穴を弄んで頂いて構いませんのが、最後の射精だけは、前の穴でお願いします」

「ん。お前は本当に可愛い女だな…ハマーン。だが、初めて出会った時はこんな関係になるとは思っ
てなかったよ」

「私も…です。でも、あの時私の裸をご主人様に見られた時から、はあ…はあ…こうなる事は決まっ
ていたのかも知れません」

「そうだな…そうだったな。お前は姐とドズル様のセックスの現場を見てオナニーしていた淫乱女だっ
たな」

「は…はい。普段は高貴な仮面を身に付けていた私ですが、本当は淫乱で変態で、常に発情していな
いと落ち着かないどうしようもない女です。ああ、いたっ…ぐあっ…!!」

その直後、私は今までに無いレベルの排泄感を覚え、天井を見上げながらブルブルと震えて硬直した。
だが、アヌスが広がっても目一杯の栓をしている為、出す事は当然ながら出来なかった。排便の波が

収まり、息を荒くして床に倒れ込んだ私を横目に、シェアは壁に仕込まれているスイッチを押した。すると、天井が開き、天井から無数のフックの様なものが垂れてきた。

私は苦痛に必死に耐えながらそれを見ていると、シェアは私のお尻と腰と背中、そして両足の部分に縄を通し（正確には緊縛された縄に結んだ感じ）、それぞれをフックに引っかけた。

やがて、彼はリモコンの様な物を操作すると、フックが天井の方へ戻っていき私を吊り始めた。重力のお陰で、緊縛された私の体が容赦なく縄に食い込んでいく。

「ああっ！！！」

浣腸された痛みと、縄が食い込む痛みに耐えていると、彼は私の股間に締められている二本の縄を両側に開くと、クリトリスも同時に刺激する事が出来る大きめのバイブを挿入し始めた。

「うっ……ぐうううっ！」

バイブは、その大きさの割には割と簡単に埋没していった。やがてスイッチが入り、前の穴とクリトリスに強烈な刺激が伝わってきた。

「ぐあああ！！！」

苦痛と快楽がまぜこぜになり、縄が食い込んでいる部分が熱く感じるように思えてきた。もう、自分が一体何をしているのか、どんな事になっているのか、考える事すら出来なかった。

その時、「バチーン」という音と共に、私の体に衝撃が伝わった。彼が私に鞭を振り下ろした音だった。

「がっ！はあ…はあ…」

音の割には、それ程痛くは無いのだが、それでも今の私には充分衝撃的だった。そうやって何度目かの鞭を振るった時、彼はこう言った。

「自分がアムロとやった事を、もう一度私の前で懺悔してみろ！ハマーン！」

「はい」

私は一瞬目をつむり、その直後混乱した頭で必死に言葉を発した。

「私、ハマーン・カーンは、シヤアというご主人様がおりながら、アムロに緊縛して浣腸した姿を見せて欲情させた上に、排泄行為すら披露した変態です！その上彼の前で股を開き、彼のペニスを受け入れて精液を搾り取った、とても恥知らずで淫乱な女です。こんな変態で、最低なメス奴隷の私ですが、今後ご主人様以外のペニスを一切受け入れない事を誓います！シヤア・アズナブル様だけが、私の全ての穴を自由に使う事が出来る唯一のご主人様です！」

「本当か！？」

「はい！」

「よし！その言葉確かに聞いたぞ。ハマーン」

「は…い。この誓い…私の命にかけてもお守りいたします！」

私は、淫乱な言葉を言い放った自分に陶醉していた。

脳内麻薬が出まくっている状態である私にとって、もう痛みを現実の痛覚して感じる程の理性は残っていないかった。

そうしていると、彼はうつ伏せの状態のまま吊られていた私の姿勢を、状態を起こしてM字開脚の状

態でシェアと向き合うような体勢に吊り縄の状態を調節した。

かなりきつい体勢の筈だった。だが重力を低くしたのかそれとも私の感覚が麻痺している為なのかは判らないが、それ程苦痛には感じなくなっていた。

やがて、彼は私の股間に埋もれていたパイプをゆっくりと引き抜くと、それを私の目の前に尽きだした。私は当然のようにそれを愛しそうになめ回した。

「お前の淫乱な液体はどんな味だ？」

「はい……とつてもおいしいです。私のいやらしくて淫乱な液がたつぷりと付いていてとつてもおいしいです」

私は下を出して、トロロンとした目でそれをなめ回していると、シェアはそれを床に置き、私にキスをした。

「ご主人様……ご主人様の口が、私の淫乱な液で汚れてしまします」

「構わんよ。それよりも今までこの苦痛に良く耐えてくれたな」

「そんな事……確かに苦痛ですが、ご主人様の気が晴れないのでしたら、もっともっと責めて下さっても構いません。私の全て……私の生殺与奪権は全てご主人様……シェア・アズナブル様のものでございます。もし、私を殺したい程憎んでいるのでしたら……この快楽の中で……殺して下さい」

シェアの前では、もっと苦痛を求めてしまう……それが快楽を伴うものであるが故に……。

だが彼の口から意外な言葉が発せられた。

「ハマーン。お前を殺す事なんて……私に出来るわけがないだろう？それよりも、私のこれをお前の穴で満足させてくれないか？。ハマーン」

興奮してギンギンに反り立っているシャアのペニスが見えた。私の答えは決まっている。

「はい！私のいやらしい穴で良ければどうか使って下さいませ。そして沢山のミルクを私の中に注ぎ込んで下さいませ」

私の中で、再び淫乱な血が激しく騒ぎだすのが判った。やがてシャアは、股の縄を手でこじ開け、ゆっくりと突き上げるような感じでペニスを挿入してきた。

「あ……入ってくる……」

最後にグツと一突きがあり、彼のペニスが完全に私の中に埋没した。

「入ったぞ。ハマーン」

「はい。感じます！私の中にご主人様のモノが入ってます……ああ……この圧迫される感じ……これをずっと待っておりまして」

シャアは私にキスをした後こう言った。

「……ご主人様では無く、シャアと言ってくれないか？」

「はい……シャア……とっても愛してます」

「私もだよ。ハマーン」

私は、動きづらい手でシャアの首に抱き付いた。彼は私の両太股に手を当てて、宙吊りになっている私にペニスを突き上げる感じで動いた。余りの快感に、私は頭を振りながら叫んでいた。

「ああ……！気持ちいい！とっても気持ちいい！体が全部あそこになったみたい！ああん！気持ちいいよおお！」

宙吊りになり身動きが取れない体で、頭を左右に振りながらシアアの欲望のままに下半身を貫かれる私……。端から冷静に見れば、その異様な光景は、とても耐えうるものではない事だろう。だが、それを頭の中で思い浮かべる事が、淫乱な私にとっては更なる快感へと繋がっていた。

彼以外はもう何もいらぬ……そんな自分の心を私はずっと偽りながら、ネオ・ジオンの指導者として振る舞ってきた……。もう、そんな事を気にする必要は一切無いのだ。

やがて、快楽の限界……昇天が訪れようとしていた時、彼が口を開いた。

「ハマーン。そ……そろそろ限界だ……」

「はい！私も限界です。一緒にいイッてしまいそう……」

「ふふっ、苦しい中でも感じているとは……本当の変態だな」

「はい。私は変態でいやらしい一匹のメス犬です」

私が快楽の階段を登り詰めようとした時、シアアは部屋のある場所に向けて何やら合図をしていた。

私はもうろうとした中で、そちらの方を見ると、注意しなければ気付かないような大きさではあるが、カメラのレンズが見えた。

『えっ！』

その時、ロックしてあった筈の自動ドアが開き、ボンテージファクションに身を包んだ一人の女性が入ってきた。ナナイ・ミゲルである。

私は彼女を見た瞬間、恥ずかしくて目を合わせられなかった。そうしていると、シャアがピストン運動を続けながら言った。

「どうした？ ナナイに挨拶しないのか？ ハマーン」

「でも……でも……」

「お前だってナナイの穴という穴を調教し尽くしたんだろう？ その彼女に自分が昇天する所を見て貰うんだから光栄というものじゃないか……違うのか……？」

心なしか、シャアは先程よりもペニスは固くなり、興奮が増したように見えた。そんな私達を軽蔑の表情（もちろん演技なのであろうが）で見つつ、ナナイはソファアに無造作に座った。

「あ……あっ……！！」

元とは言え私の部下であるナナイに、こんなみじめで恥ずかしい姿を晒す羽目になるとは……。だが、彼女は今、彼の元にいる……つまり私よりも上の立場なのだ。故に私に反論する余地は無かった。

それにシャアはそう言う行為を心の底から楽しむ筋金入りのサドなのだ。

「はい。シャアの言う通りです。私の淫乱で快楽にまみれた姿、昇天する姿、私のいやらしい穴へシャアのミルクが放出される瞬間の姿を、私は私のご主人様の連れであるナナイ様に見て欲しいです。いえ、どうか穴の開くまで見て下さいませ。……あっ……恥ずかしい……」

私は、余りの恥ずかしさに顔を手で覆い隠した。

「だ、そうだ。どうする？ ナナイ」

「そうね……私はこんな女の昇天姿など見たくは無いのですが……大佐が見ろというのでしたら……」

「ふふ。そう言うな。こいつはかつてお前の上司だった女ではないか」

「そうですけど……今は私の大佐に交尾をされて尻尾を振っているただのメス犬です」

不満そうな表情をしながらナナイはプイと横を向いた。

「お前に全てを仕込んだ女が実はこんなに淫らで変態な女……いやメス犬だったと知ってどう思った。正直に言ってみるがいい」

彼女は、一瞬言葉に詰まったが、やがて意を決したように話し始めた。

「こいつが淫らで変態だという事は、私を調教した時に判ってましたが……こんな苦痛を受けまくって感じている女……いえメス犬だったなんて思いませんでしたわ。ホント汚らしい！」

「ああ……！」

そのナナイの蔑む言葉ですら、今の私にとっては快感を高める材料だった。ナナイは更に話を続けた。

「別室でずっと拝見してましたが、私がこのメス犬から受けた様々なハードな行為……実は全て大佐がこいつに仕込んだ事だったので。私……今回の事は全て経験しましたもの！」

「ああ、こいつの穴という穴、全ての性感帯は全て私が開発したからな」

「やつぱりそうだったんですね。ホント、大佐のペニスを入れさせて頂けるだけでもご褒美だというのに、中にミルクを注ぎ込んでくれだなんて……マゾのくせに何て身の程知らずで淫乱で、いやらしいメス犬なんですよ！」

ナナイはそう言ったが、実際彼女を調教していた時に、その事については何度も話していた事だ。『私はシャアのM女で、彼の子供が欲しい』と……。

そう、これは場を盛り上げる演技なのだ。私がSかMかの真偽を話しているのではなく、このシチュエーションを楽しんで場の興奮度を高めているのだ。

そうしていると、ナナイが私の顎をつかみ、自分の方に強引に向けると、目一杯の軽蔑な表情をしながら、私をこう罵るのだった。

「おい、この淫乱で変態なメス犬！お前がしているセックス……いや交尾は、この部屋中に仕掛けられてるカメラでしっかりと撮られてるからな！もしお前が今後妙な行動を起こしたら、この映像を地球圏にばらまくから覚悟しろよ！」

「ああっ……！」

私はゾクゾクとした快楽を覚えた。

「ホント、それで感じてるなんてさ……何て変態なんだろうねえ。こいつをネオ・ジオンの総帥ハマーン様と言い、尊敬の念で抱きながら死んでいった若者達に見せてあげたいわ！さぞかし落胆するだろうねえ！」

ナナイは私の顔に唾を吐きかけた。とても惨めで悲しい事なのだが、今の私にはそれすらも快楽の要因にしかならなかった。

「ナナイ……いえナナイ様……私ハマーンは……本当の心を偽り、今までネオ・ジオンの総帥として君臨して参りました。でも実体は縛られて浣腸されてた上に吊されて鞭で打たれて、いやらしい穴にペニスを突っ込まれて感じている淫乱で変態な一匹のメス犬です。今まで隠していて……申し訳ありません」

「ふんっ！判ったわよ！気が乗らないけどお前の交尾姿……じっくりと見てあげるわ。だから、さっさと昇天しなさいよ！この変態が！」

その言葉を聞いた直後、私は我慢の限界に達しようとしていた。

「……あっ……ああっ、もうダメ……シャア……イキそうです！」

「じゃあ出すぞ！」

「はい！ああっ……！！！」

シャアの動きが激しくなり、体を硬直させたかと思うと、ペニスが一瞬太くなった。そして次の瞬間彼が私を思いつき抱き締めたかと思うと、身体が痙攣してペニスの先からミルクが私の中に注ぎ込まれた。

その瞬間、私も絶頂を迎えた。

「イクウウウウッ！」

身体が激しく痙攣し、頭の中が真っ白になる。アムロとのセックスも確かに気持ち良かったが、やはり私を本気で昇天させるのはシャアなのだ。それをはっきりと自覚した瞬間だった。

やがて、お互い身体が弛緩してくるのを感じた。

「はぁ……はぁ……シャア……好き……大好き……」

私は彼の身体に抱き付いたまま、唇を奪い舌を這わせた。シャアはそんな私の頭を優しく撫でていた。そうしていると、快楽で忘れていた浣腸の痛みが、今まで以上に容赦なく襲いかかってきた。

「ああっ！いたっ！痛い！！ああ……出る……出る……我慢出来ない……ああっ！」

しっかりと栓をしている筈のアヌスから、臭くて茶色い汁が漏れ、尻を伝わって床に落ちた。それを見たナナイが言い放った。

「シャア様、そのメス犬……尻から漏らしてますわ」

「……この辺が限界という事か……仕方ないな。ナナイ……あれを用意してくれ」

「判りました」

彼女は別室へ行つて底が少し深くなっている洗面器を持ってきて私の真下に置いた。

その間にシャアは私を吊してゐる紐を調節して、和式トイレで排泄する様な格好にした。ただし、足は床に着いていないので、中吊りのままである。

そうしているとナナイが私の手を後ろで縛り、排泄がし易い様にと股の部分を通してある縄だけを切った。その行為をシャアはワインを注いだグラスを片手に、ニヤニヤした表情で見ていた。どうやらこれ以降の排泄行為は、ナナイが主導で行うらしい。

やがてナナイは身に付けているボンテージ衣装を脱いで裸になると、私の目線に合わせて前しゃがみながら話し始めた。

「じゃ、これからお前の排泄作業を見てやるけど……この洗面器からこぼれた分は、全部口で吸い取って掃除してもらうから覚悟して出しなよ！いいね！？」

「ううっ……」

私がお腹の痛みで唸っていると、彼女の容赦無い平手打ちが飛んできた。

「メス犬……返事は？」

「は……はい。判りました。こぼした分はきちんと私の口と舌を使って掃除します」

「その言葉……確かに聞いたからね。まっ、飲むというのも可哀想だから、口に入れた分は洗面器に出してもいいよ。ああ、そういやお前は排泄物すら食べる事が出来る変態だったねえ。なら、余計なお世話かしらね……はははっ！」

ナナイは高笑いをしながら、アナルバルーンの空気を抜いた。そして私にこう言い放った。

「じゃ、さっさと排泄しなっ！この変態！」

私のお尻をナナイがバチーンと強烈に叩いた……その瞬間、今まで私のお腹の中で暴れ回っていた浣腸液……茶色く濁った液体が、アヌスからアナル栓を吹き飛ばして一気に洗面器へ吹き出した。

『ジャー』という排泄音が何度も室内に響き渡り、やがて腸内の奥に残っていた固形物が排泄され始めた。その頃になると、部屋中に排泄に伴う猛烈な悪臭が漂った。ナナイがたまらないと言った表情で言い放った。

「私は点滴しか与えてなかった筈だけど、どうやったらこんなに臭いモノを身体から出す事が出来るんだろうねえ？えっ？メス犬さん！？」

「も……申し訳ありません」

「それに、見てご覧なさいよこの状況……床中がお前のウンチまみれで酷い有様だよ！おまけに私の足にも引っかけてさあ……」

「申し訳ありません……本当に申し訳ありません！ナナイ様……」

「じゃ、さつき誓った通り、口で掃除するんだよ！判ったね！！」

「はい…」

ナナイは私の前に立つと足を開き、私の口を開かせるとピアスが付いているラビアを開いて尿道が口の真ん中になるように姿勢をとった。

「じゃ、とりあえず床にウンチをまき散らしたお仕置きだよ。言っとくけど一滴でもこぼしたら、しばらく縛ったままこの床に転がしとくからね。判った！？返事は？」

「はいっ…。判りました。ナナイ様…」

彼女は私の頭を押さえつけて、私の口の中へチョロチョロと放尿を始めた。それはかなり塩辛かったのだが、こぼさないようにと必死に飲み込んだ。

私がむせ返りながらも一滴もこぼさずに尿を飲むと、それが不満そうな彼女は冷静さを装いながらこう言い放った。

「良くこぼさずに全部飲めたものよね。まあ、貴方は変態だから、普通の飲み物よりも私のオシッコの方が好きだったのかしらねえ！」

「い…はい！私は変態ですから、ナナイ様のオシッコ…いえ、聖水をとんでもおいしく頂く事が出来ました。私の為に貴重な聖水を提供して下さいまして本当にありがとうございます」

私は一瞬否定しようと思ったのだが、それではこの行為を白けさせるだけである。私には『はい』と答えるしか選択権は無かった。

「そうかい。じゃ、そのお札にご褒美をあげなきゃね。目を閉じて口を開けなっ！」

「はい」

私は言われるままにそうすると、やがて口の中に小さいながらもドロツとする塊が押し込まれた。そう、私の……である。そしてナナイが軽蔑した口調で言い放った。

「あんたのモノなんだから、吐き出さないでちゃんと味わってから食べなよ！ああ臭い臭い。大佐、一緒にシャワーを浴びませんか？あいつの体液が身体に付いてると思うと汚らわしくて仕方が無いんです」
「そうだな……」

「大佐、お疲れの所申し訳ないのですが……その……私にも……ミルクを頂けないでしょうか？」

「ん？お前も私のこれが欲しいのか？」

「勿論です。だって大佐のペニスは私のモノなんですもの。どうか私の穴を存分に使って口直しして下さいませ。それに私の方があのメス犬よりも大佐を満足させる事が出来ますわ」

「ナナイがそう言うなら……やろうか」

ソファーから立ち上がるシャア。それを見て嬉しそうに抱き付くナナイ。

「じゃ、今からシャワーを浴びて一回、ベッドでもう一回お願いします」

「おいおい。私の身体が持たんぞ……」

「ふふっ、大佐なら大丈夫。きっと出来ますわ」

二人は私を宙吊りにしたまま、シャワー室へと消えて行った。

排泄物の匂いで充満した部屋に吊されたまま残された私は、自分が余りにも惨めすぎて目から涙がこぼれてきた。

だが、これは私が選んだ道なのだ。それが嫌なら、シャアの元から去ればいいだけなのだ。それだけの事だ。そうしている間にも、私の身体からは残った排泄物が時折ボトツと垂れ続けた。

その後、私が宙吊りの状態から解放されたのは、彼らが三回目の行為を終えた数時間後の事だった。その後の目を覆う様な行為に関しては、皆様のご想像にお任せする。

*

*

*

私はその後も、リハビリを行いながらも、同様の性行為を何度と無く行い、その都度シャアのミルクを私の中へ何度も受け入れ続けた。

今思うと、彼は新たな「ネオ・ジオン」を創設する為に行動しながら、私やナナイとハードな行為を連日行っていたのであるから、よく体力が持ったものだと感じるばかりだ。

しかし、彼は一体いつ寝ていたのだろうか？

ナナイはシャアの指示で私達の行為を手伝った後、毎回必ず私に行った行為や発言について頭を床に付けて謝罪した。

そんなある日の事である。

「ハマーン様……今回もハマーン様を侮辱する数々の行為を実行してしまいました。ハマーン様さえ良ければ、ハマーン様が私に受けた行為の全てを私にして下さっても構いません！それでハマーン様の心

が晴れるのでしたら、このナナイ……喜んでお受けします！」

「ナナイ……毎回言うのだが、気にする事は一切無いのだよ。これはお前も私も、そしてシヤアも判っていてやっている事なのだからな。それに、それを否定してしまつてはこのプレイが詰まらなくなってしまうだろう？お前だつてそれは判つてる筈だよ。お前は、お前に与えられた役……私を蔑み、罵り、そして非情なまでに責め上げるといふ役をこなせば良いだけだ。私はそれで良いと言っているし、そうされる事が快樂だとも言っているのに……何故お前が困る事があるのだ？」

「はい。それは……充分理解してます。しかし、だからと言つてそんな事を続けていては……私の心が壊れてしまいそうなのです。私は、私が尊敬する人を罵り、蔑み、汚して平気でいられる程厚顔無恥な女ではありません。どうか、どうか今一つお考えを……」

泣きながら言うナナイに対して、私は彼女の唇を奪つた後で、そつと耳打ちした。

「お前は私とは違ってSの素質があるのだがな……」

「はい。確かにプレイを行っている間はこれ以上無い程の陶醉感を覚えるのですが、冷静になると自分の行つた行動に対する後悔の念が襲つてきて……」

「耐えられないと言うのか？やがて慣れてくる筈だよ……Mの私ですらそうなのだから……」

「ハマーン様……」

「では何回かに一回は、私とお前の立場を変えてプレイするようにシヤアへ言つておこう。それでいいのか？」

「ありがとうございます。ハマーン様！」

「でも、私が受けてる行為は……お前の人格を粉々に破壊するかもしれんぞ。見て判つてるとは思うが、本当に苦しくて辛い時間が長く続くのだよ……。それでも……お前は本当にいいのか？」

「勿論です。私は、私がお慕いし、尊敬するハマーン様に徹底的に責めて頂ける事がとても好きですし快樂なものですから……」

「私に変態で淫乱でどうしようもないメス犬だと判つていても……それでも慕ってくれるというのか？」

「はい。だって私もハマーン様と同じ変態で淫乱で大佐のペニスが大好きなメス犬ですから。それに私が全てを仕込まれたのは大佐ではなくハマーン様なのです。大佐は勿論大好きですが、ハマーン様を差し置いてまで幸せになりたいとは決して思いませんもの。お二人の幸せこそが、私の幸せなのです」

涙を拭きながら答えるナナイを私はとても愛しく思え、彼女を優しく抱き締めた。

そしてその日は久しぶりに彼女と身体を重ねた。彼女が望む、徹底的にハードなSM行為を……。

勿論それも記録映像として撮り、シャアに提供する事を前提にして……。

私とシャア、そしてナナイとの行為を、他人が『変態行為』という言葉で言い切ったとしても、私は一向に構わないと思っている。事実その通りだし、冷静に判断すればやり過ぎている行為も多々あるからだ。だが、これは他人の為に行っている行為ではなく、私達が私達だけの為に、好きでやっている行為である。公衆の面前で披露しなければ、誰からも非難される事は無い筈だ。

世の中に人がいる数だけ様々な愛の形があるように、これもまた一つの愛の形なのだ。

ナナイはともかく、私とシャアはそうする事でしか心の安定を得られない環境のまま時を重ねてきた訳であるから、まともなセックスを行った所で残念ながら何も得るものは無い事だろう。

悲しい事なのかも知れないが、それが私達の『現実』なのだ。

そして、そんな変態的な行為を重ねて数ヶ月後、私のリハビリが終了したのと同じくして、私の体内に新しい命が宿っている事が判明した。

それを境に私はシャアの元を離れ、サイド6にて偽の戸籍を使いながら彼の子供を産み、育てるのだが、それはまた別な機会に話す事としよう。

*** 静寂な宇宙（そら） 第一部 完 ***